

下田 剣吾（しもだ・けんご） 2004年政策科学部卒

東日本大震災の直後、僕は仙台の避難所でNHKディレクターとして取材していた。止まらない余震や原発事故。必死に目の前の業務をしてはいたが、この先どうなるのだという足元が崩れるような不安を今でも憶えている。福島県への訪問決定を知らせるハガキに正直驚いた。原発や放射性物質そのものをおそれたわけでない。ただ、観光に行くとかふと訪ねる先に福島を選ばなかった自分がいた。郡山といわきをめぐる中で同行した福島県校友会の三村幹事長は話の中で悔しさや悲しさで何度も涙で言葉を詰まらせた。津波でいわき市の自宅を流された体験をバスの中で語ってくれた校友の遠藤雅彦さんは今、避難した大阪で同じ避難者の支援に尽くしている。そうした姿に、僕は震災後の自分を振り返り、被災地の状況や悲しみがあまりに深刻な分、その痛みを見ないようにしようとしていたのかもしれないと思った。また誰とも繋がる事のない言葉だけの「絆」は、かえって今も苦しみ続ける被災者との距離を広げてしまうのだと。いわきの夜、ぼくは同室の北九州の先輩二人と酔いの中で未来や被災地について熱く議論した。お互いが校友であるという信頼がそうさせた。復興には長い時間がかかるのだろう。だから僕は被災地を忘れず、考え続けようと今回の訪問で決心した。僕にとってその糸となるのは同じ立命館の先輩や仲間が被災し、苦しみ、この瞬間も立ち向かっている、それだけでじゅうぶんだ。